

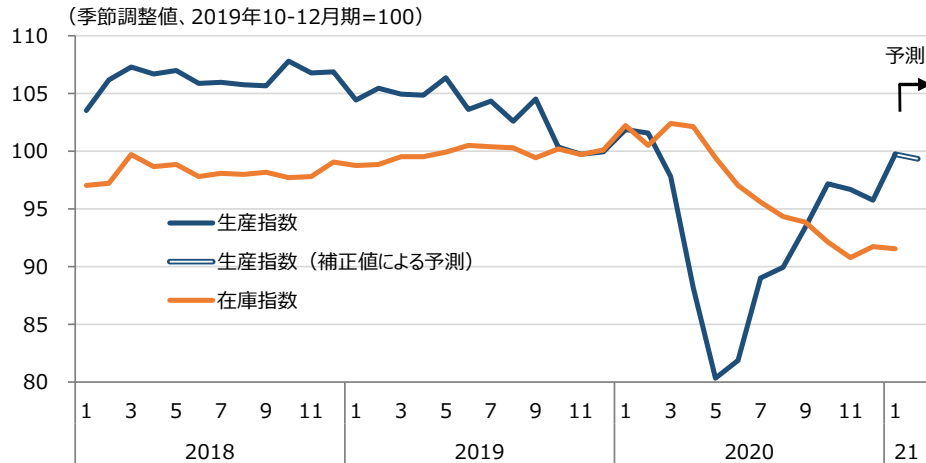
日本

鉱工業生産指数（21年1月）

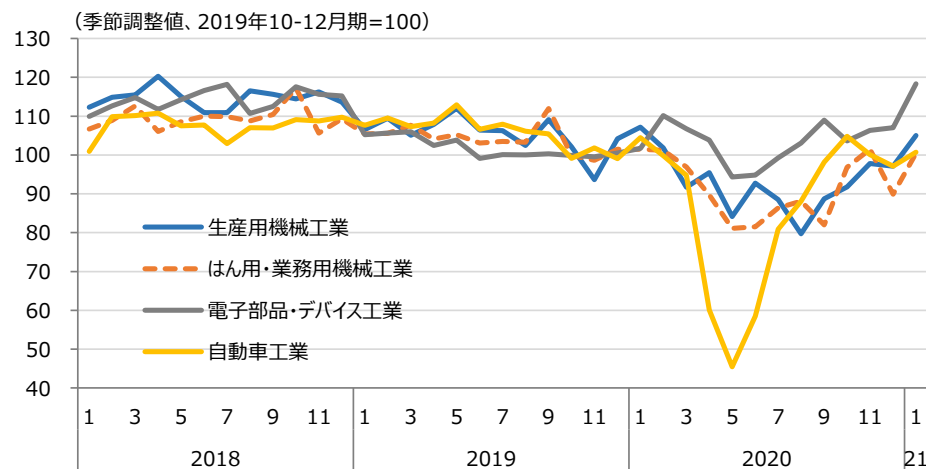
持ち直しの動きは継続も、上昇ペースは鈍化

政策・経済センター
田中康就
03-6858-2717

1 鉱工業指数（生産）



2 業種別の生産指数



評価ポイント

今回の結果

- 21年1月の鉱工業生産指数（速報）は、季調済前月比+4.2%と、3カ月ぶりに上昇（図表1）。コロナ危機前（19年10-12月期）の水準にまで持ち直した。業種別にみると、15業種のうち13業種が増加した。
- 電子部品・デバイス工業（季調済前月比+10.5%）は大幅に上昇。直前のピークを上回る水準となった。中国向け輸出の増加のほか、リモートワーク対応、5Gや自動車の電動化に関連する投資需要が押し上げ要因となっている模様だ。
- 生産用機械工業（同+8.1%）、はん用・業務用機械工業（同+11.7%）も高い伸びとなった。コロナ発生直後に見合わせていた設備投資で一部再開する動きが出始め、20年後半以降は持ち直しが続いている。
- 自動車工業（同+3.7%）は、3カ月ぶりに上昇。もっとも、米国向けを中心に輸出が減少に転じており、持ち直しの動きは一服している。
- 製造工業生産予測調査によると、2月の生産は、企業の予測値と実績値の平均的なズレを経済産業省が補正した値が前月比▲0.4%程度となっている。

基調判断と今後の流れ

- 生産指数は、持ち直しの動きが継続しているものの、国内外での新型コロナの感染再拡大を背景に上昇ペースは鈍化している。
- 先行きの生産は、経済活動の抑制度合いが21年初に比べて弱まると見込まれることから、持ち直しが続くと予想する。もっとも、上昇ペースは鈍化した状態が続くだろう。投資財生産は、企業の投資姿勢の慎重化が引き続き抑制要因となるほか、消費財生産も、雇用・所得環境の悪化による家計の購買力低下を背景に回復には時間がかかると見込む。
- 生産の下振れリスク要因は、ウイルスの感染力や毒性の強まり、ワクチン接種の遅れなどにより、国内外で強力な経済活動の抑制を継続せざるを得ないことが挙げられる。